椙山女学園大学研究論集　第54号（社会科学篇）2023

# ステップファミリーに対するソーシャルワーク実践にむけた支援ツールの展開構想

## ――ストレングス-レジリエンスモデルに焦点化して――

小榮住　まゆ子*

Social Work Practice of the Life Enhancing Tools for the Stepfamilies
—Focusing on Practice Model of Strength-Resilience—

Mayuko KOEZUMI

## Ⅰ．はじめに

わが国において，ステップファミリーは一見した家族形態や社会文化的な固定観念，相談支援機関の少なさ等を背景に，自ら口外しない限り表面化しにくい家族である。しかし，多様なライフスタイルによって，離婚や再婚へのハードルは以前に比べ低くなり，それを機に形成されるステップファミリーも珍しくなくなってきた。三井住友カードは，新サービスの家族ポイントを訴求するCMで母の再婚によるステップファミリーを題材にしている[1)]。そこでは家族形態の柔軟性や多様かつ複雑な関係性が描写され，現代のさまざまな家族の在り様を支持するメッセージが理解できる。

一方で，母親の交際相手を加害者とするステップファミリー予備軍も含め，その多様・複雑な関係性から児童虐待やDV等の深刻な問題が度々報道されている[2)]。「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第17次報告）の概要」（厚生労働省 2021）によると，統計をはじめた2005年から2021年の17年間で，心中以外の虐待死ケースにおける加害者がステップファミリーである割合は11.9％，心中による虐待死（未遂を含む）ケースでは1.6％となっている。とりわけ平成30年「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（概要）」（厚生労働省 2018）では，ステップファミリー内で起きた死亡事例が検証事例として取り上げられていることからも，ステップファミリーが虐待リスクとして捉えられていることが分かる。また，医療や学校現場では虐待に加え，居場所問題の要因としても認識されつつある（石倉 2020，笹倉・井上 2018）。

こうしたなか，児童相談所では，支援対象がステップファミリーである場合，一時保護だけでなく加害者となる継親への踏み込んだリスクアセスメントや家族関係全体をふまえたアセスメントの実施，そして生育歴を踏まえた寄り添う支援としてのソーシャルワーク

*　人間関係学部　人間関係学科

が求められている（厚生労働省 2018）。また，児童養護施設では，入所児童の約 1 割以上が該当者であり，約 6 割以上の家庭で今後ステップファミリーになる可能性がある現状に鑑み，措置解除による家庭復帰，家族再統合等にむけた家族ソーシャルワークにおいて，ステップファミリーに生じる問題の理解や支援方法を学ぶ必要性も指摘されている（大塚 2018）。

しかし，ステップファミリーに対する既存の支援方法は，継親子関係をリスクとして捉え，あるべき家族，あるべき親子関係から減点するアセスメント方法や，離婚・再婚・同棲等変化する環境へ（継）親も子も適応すること，それにむけ認知や行動を修正する介入に偏向しているといわざるを得ない。昨今求められているレジリエンス概念（得津 2018，上田 2021）の活用や醸成を志向する家族ソーシャルワークの必要性からも，ステップファミリーだからこそ抱える葛藤や問題に対し（野沢・菊池 2014，水谷 2014，勝見 2014，野沢 2015），逆境をどう乗り越えてきたのか，不適応であり続けることにどう家族が寄り添えたのかといったレジリエンスを可視化できるアセスメント方法が求められる。そして，その強みをいかしながら，どのように今の家族へと変容してきたのか，今後，起こり得る問題や葛藤へどう対処しようとしているのか，そのパワー溢れるステップファミリー形成過程をオルタナティブストーリーとして紡ぎ語れる支援方法を構築する必要があると考えるのである。

そこで本論文は，まず，わが国におけるステップファミリー支援の現状を社会資源と支援方法に焦点をあて文献調査及び WEB サイト調査から整理し，ソーシャルワーク方法の課題を明らかにする。その課題を踏まえ，ストレングス–レジリエンスモデルのソーシャルワーク実践方法にむけ期待される方法として活用されている支援ツール「エコスキャナー」と「ライフストーリーワーク」の特性を比較検討し，両支援ツールの応用可能性について考察する。尚，本研究では，「ステップファミリーでない母子家庭」，「親の恋愛中のパートナーとの同居」，「不安定な婚姻を繰り返す家庭」「内縁夫」等，多様な記述により描かれる「婚姻関係にないパートナーと形成される家庭」も含め，引用でない限り「ステップファミリー」と記述し，継親子関係のある家族形態と同義とする[3)]。

## II．わが国のステップファミリー支援の動向

ステップファミリー支援が展開される社会福祉関連機関や施設には，児童相談所，児童養護施設をはじめとする児童福祉施設，児童家庭支援センター等，自治体による子育て相談窓口が考えられる。こうした「ソーシャルワーク実践現場」ではどのようにステップファミリーが理解され支援されているのか，昨今の動向と課題について先行研究から整理していく。

児童相談所で活用するリスクアセスメントに「一時保護決定に向けてのアセスメントシート」（厚生労働省 2013）がある。虐待の発生につながる可能性のある家庭環境として「祖父母や養父母等を含む家族状況」，いわゆるステップファミリーの有無をチェックする欄である。これにより，家族の変化や時系列的変化の観点を記録し，虐待リスクの高低から一時保護するか，児童福祉司による（継）親との継続的な関係構築を優先する支援的な関わりが行われることとなる。しかし，実際は DV 家庭あるいは正当な理由が薄い転居，

婚姻関係がない10代での出産といった高リスクがさらに加わることや，48時間以内の目視，総合的なアセスメントの実施，関係機関からの情報共有等が難しいことから，すみやかに虐待の対応にあたることが困難な状況にある（山縣 2021）。

こうした問題点は，ステップファミリー内で生じた虐待死事例が取り上げられている「子ども虐待死亡事例等の検証結果等について」（厚生労働省 2018）でも指摘されている。ここでは，「血縁のない恋愛中のパートナー」も虐待リスク要因の 1 つである。事例検討を通じて，継親と実親との支配的な関係性，継親子の関係性，家族関係全体を踏まえたアセスメントが不十分であること，養父への指導が検討されず十分に指導が行えていなかったこと，母子保健，幼稚園等関係機関との連携が不足していたこと等が具体的な問題として指摘されている。これらを踏まえ，恋愛中のパートナーへも踏み込んだ虐待リスクアセスメントの実施，「（継）親」や「家族関係全体」を踏まえた客観的なアセスメントの実施，保護者を具体的に支援するための計画作成，生育歴を踏まえた寄り添う支援の必要性，連携体制の構築，児童相談所職員のアセスメント力の補強等が課題として提言されている。

一方，児童養護施設等の児童福祉施設では，ファミリーソーシャルワーカーによる家族関係調整や家族再統合支援，親指導・親支援が期待されている。しかし，あくまで要保護児童のケアが本質であり，全国的に専従での配置率が低いファミリーソーシャルワーカーの業務としての家族支援は「関係機関との連携」に留まり，親の指導やケア，生活再建にむけた家族ソーシャルワークにまで手が回らないこと，また，ひとり親や離婚再婚を繰り返すステップファミリー等きわめて脆弱な生活基盤である家庭に対し，何を具体的に家庭支援や親指導するのかが曖昧なままであるといった問題が指摘されている（大澤 2012，池田 2015）。こうした現場の実態に鑑み，職員がステップファミリーの問題特性や支援方法の基礎知識を学ぶ必要性が示唆されている（大塚 2018）。

また，学校現場では，ステップファミリーをはじめ，母子家庭，実母による自己都合の優先，外国にルーツをもつ，保護者の疾病や障害等に加え，これらの根底にある不安定な経済状況が複合的に組み合わさった社会経済的要因により不登校が引き起こされると考えられており（笹倉・井上 2017，瀧澤 2017），子どもが安心できる居場所にむけ，スクールソーシャルワーカー，教員，スクールカウンセラー等多職種チームで学校内や家庭訪問により相談支援，見守り支援，関連機関間の仲介・調整等といったコーディネーター機能が期待されている（瀧澤 2015）。

次に，ステップファミリーを対象とした福祉施策やサービスの動向について WEB サイト調査から整理する。ステップファミリーを対象に施策やサービスを提供する自治体は決して多くはないが，ステップファミリー内で生じる傾向の高い問題の解決策を当事者である「親（大人）版」と「子ども版」冊子にまとめ，児童相談所や自治体の子ども福祉課等相談窓口の情報とともにホームページ上に掲載している。例えば，京都府の「あした天気になあれ！子どもと一緒に新しい家庭をつくる人々の幸せのために」[4]，枚方市の「ステップファミリー応援冊子おとな編・子ども編」[5]をはじめ，東大阪市[6]や小野市[7]等でも同様の冊子が掲示されている。また，ステップファミリー専用の子育て相談窓口もいくつかの自治体で確認できる。横須賀市[8]では「ステップファミリーのための子育て相談」窓口が設置され，「新たな家族の絆に幸せを感じる一方で生活環境の変化などによるストレスや

不安など」の解消にむけた個別相談支援が行われている。また，大垣市[9]でもステップファミリーに特化した相談窓口設置の必要性が子育て支援会議で言及されるなど動きがある。さらに，豊後高田市[10]では，18歳未満の子を育てる再婚家庭に対し，子育て環境等を背景に再婚した夫婦が安心して子どもを育て，安定した家庭づくりを支援し定住促進を図ることを目的に20万円の現金が給付される「子育て世代ステップファミリー応援金」交付事業を展開していた。しかし，それ以外の多くの自治体では標準家族の子育て相談に内包した支援に終始し，公的相談窓口の少なさが問題として指摘されている（新川 2017: 150−154）。

民間の支援組織や団体は，当事者組織から誕生し発展してきている。日本初のステップファミリー支援組織の任意団体「Stepfamily Association of Japan（SAJ）」[11]は，今から20年も前にあたる2001年に設立されている。当事者や支援者との連携による実践及び学際志向の支援方法の開発にむけ，当事者の自助グループを中心に北米のステップファミリー向けプログラムを日本の実状にあわせ展開するなど，個別支援，ピアグループ支援による実践と調査研究の両輪で進めている。また，家裁調査官研修・虐待予防関連機関での研修講師等，啓蒙事業も行うなど幅広い取り組みが特徴である。NPO 法人「M-STEP」（千葉県柏市）[12]も当事者によって組織化された相談支援窓口で，ステップファミリーへの実態調査研究をはじめ，関連図書の発刊や啓発活動を行っている。特に，子連れ再婚家庭支援者養成講座を実施するなど，ステップファミリーに特化した支援者養成にも力を入れている。他には，「ステップファミリーサポート協会カモミール」（香川県）[13]，「コ・リーダーズ」（京都市）[14]のような当事者によるカウンセリングやコーチングによる支援，ピアカウンセリングやネットワーキングを目指す「エクセルステップファミリーのためのコミュニティライン」（オンライン）[15]，「ステップパパの研究会」（東京都）[16]，「ステップファミリーさいたまの会」（埼玉県）[17]も存在する。このような当事者同士の相互支援の場に加え，当事者の声を行政機関に届けるソーシャルアクションをも志向した取り組みも散見される。さらに，ひとり親家庭からの継続支援としては，親居親と子の面会交流を実施することが困難な場合にスムーズに面会交流が行えるよう支援する第三者機関として自治体をはじめ，各種法人（社団，公益，NPO）による支援もあるが，利用率の低さが指摘されている（高田・藤間 2021）。

これらのことから，公的な機関や施設において支援対象がステップファミリーの場合，危機的な一時保護を通じた親子分離による子どもの権利擁護は，どの地域においても一定の機能を果たしているといえる。しかし，分離後に必要となる親支援や家族再統合支援，子どもの居場所支援としての家族関係調整等，家族へのソーシャルワーク実践は多忙な現場の状況や専門職の不在などの理由から困難な状況にあり，福祉施策やサービスに至っても十分に定着しているとは言い難い。このように各自治体，機関，施設のどの支援現場においてもステップファミリーへのソーシャルワーク実践は手探り状態にあるといえる。それに比べ，民間組織や団体は当事者ないし専門的なカウンセリングによる個別，集団支援に加え，必要な政策・サービス立案にむけたソーシャルアクション，人材育成，啓蒙活動まで多様かつ先駆的な展開がみられる。しかしながら地域により格差があり有料である場合も多いため，普遍的な支援として機能しているとは言い難いのが現状である。

## Ⅲ．ソーシャルワーク実践理論からみたステップファミリー支援方法の課題

こうしたステップファミリー支援をめぐる公私社会資源の動向に加え，昨今の先行研究を踏まえ（緒倉 2021），ステップファミリーに対する支援方法に焦点化し，ソーシャルワーク実践理論における 4 つの課題認識枠組み（中村 2017）とそれに該当する実践アプローチ（小榮住 2017）からソーシャルワークの現状と課題について考えていく。

表 1 は，ソーシャルワーク実践理論における実践モデルの枠組みに基づき，ステップファミリーをめぐる既存の支援方法を便宜的に分類したものである。治療–矯正モデルは，問題の背景や原因の追求とその修正や除去を目指す支援方法で，心理社会的アプローチ，行動変容アプローチ，問題解決アプローチ他等があたる。ステップファミリー支援においては，標準家族を参考にしたあるべき姿をゴールとした子育て方法，親子関係，愛着関係のあり方といった視点から親への認知や行動をめぐる修正や除去にむけた助言や指導が該当するといえる。カウンセリングやコーチング，応援冊子，個別相談，保護者の成育歴を踏まえた支援等，多くの既存支援がこのモデルに基づく実践であると考えられる。

また，生活–エコシステムモデルは，当事者と家庭ないし社会環境との交互作用における機能不全や自己実現に対し，当事者支援に加え，当事者と環境との関係性への仲介・調整や代替サービスの活用を通じて適応や解決を目的としている。課題中心アプローチや危機介入アプローチ等が該当し，ステップファミリー支援では，虐待対応における当事者へのケア，一時保護による親子分離，新しい家族の円滑な地域生活移行を手助けるするため

**表 1**　ソーシャルワーク実践理論における 4 つの実践モデル

| | 治療–矯正 | 生活–エコシステム | ストレングス–レジリエンス | 構造–批判 |
|---|---|---|---|---|
| 実践モデル | 生活問題は必ず原因があるという発想を起点に，課題解決にむけ欠けている点を補ったり，確実な誤りを修正したり，不必要なものを除去することを志向する実践展開。 | 生活問題は個人と環境との交互作用における機能不全から生じるという発想を起点に，課題解決・自己実現にむけ個人と環境と関係性（エコシステム）の 3 つの視点で介入を志向する実践展開。 | 通常時の個人および環境側のストレングスとともに，難事に直面した際に重要となるレジリエンスを把握し支援に活かすことで課題解決・自己実現を志向する実践展開。 | 生活問題・生活課題をうみだす社会構造に専ら焦点をあて，批判的な検討を加えるなかで社会問題の把握に努め，構造側の変革を積極的に志向する実践展開。 |
| 実践<br>アプローチ | 心理社会的アプローチ<br>行動変容アプローチ<br>問題解決アプローチ<br>危機介入アプローチ<br>パーソンセンタードアプローチ | 課題中心アプローチ<br>危機介入アプローチ | 危機介入アプローチ<br>エンパワメントアプローチ<br>フェミニストアプローチ<br>ナラティブアプローチ<br>解決志向アプローチ | エンパワメントアプローチ<br>フェミニストアプローチ |
| 既存支援 | 子育て相談<br>精神分析カウンセリング<br>コーチング | 子育て相談<br>子育て応援金 | （子育て相談）<br>（カウンセリング） | 社会調査からの提言<br>当事者相互支援組織からの提言 |

資料：中村和彦（2017）「ソーシャルワーク実践理論再構成への素描――『構造–批判モデル』導入と養成教育における具体的展開を構想して」『北星論集』54, 33–47及び小榮住まゆ子（2017）「ソーシャルワーク実践アプローチの体系化にむけた研究――支援過程に焦点化して」『人間関係学研究』15, 13–24を参考に筆者作成。

の子育て応援金の支給，子どもと別居親との間に介入し提供する面会交流サービス等がこのモデルによる実践といえる。

ストレングス–レジリエンスモデルは，当事者と環境の強さとレジリエンスを支援に活かすことで課題解決・自己実現を可能にし，エンパワメントアプローチ，ナラティブ・アプローチ等がこれにあたる。この枠組みによる支援は，当事者によるピアカウンセリングやコミュニティ内の相互支援網により行われている可能性がある。また応援冊子も読むことでエンパワーされ，掲載されている相談支援機関にアクセスする当事者もいるであろう。しかし，あくまでも当事者の主体性や解釈の仕方に左右される冊子のため，明確にこの枠組みを志向するソーシャルワーク実践とは言い難いといえる。

構造–批判モデルは，当事者の権利を擁護し，問題を生み出す社会構造への批判や変革を求めるアドボケイトの実践，高良（2017: 183–184）が提起する「闘争モデル」「協働モデル」[18]のようなソーシャルアクションを指し，エンパワメントアプローチやフェミニストアプローチがある。日本では，ソーシャルアクションが研究，実践共に停滞しているといわれているが，そのようななかでも散見されたステップファミリーのニーズ調査や当事者コミュニティのリアルな声を通じて自治体，社会，国に対し必要な施策やサービス創設にむけた動きは，高良の指摘する「協働モデル」に該当するといえる。

ソーシャルワークの実践モデルから考えると，公私ともに支援の量が少ないことに加え，支援の継続性は民間優位のため当事者の主体性や経済性に左右される。支援の内容も，当事者への成育歴を踏まえた認知や行動の修正や適応を求める方法や虐待問題，経済的問題，交流機会問題といった課題中心的な方法に偏っていることがわかる。これに対し，ステップファミリー内でも少なくない虐待問題における治療–矯正モデルの弊害として，加藤（2013）は，支援者からの「困った家族」「厄介な家族」「ダメ親」のレッテル貼りやうまくいかない支援を当該家族の責に帰してしまう危惧に加え，従来の子育て支援，要保護児童対策でみられる問題除去と保護者への養育機能の指導や強化に偏重した支援方法そのものが問題であると述べている。また，緒倉（2021）も「ステップファミリーをリスクとするのであれば，もっと手厚い支援のしくみが必要」，「家庭を築き子どもを育むということに，養育者の成育歴のみが手掛かりになるような状況では，リソース不足にもほどがある」と公的な支援の問題点を指摘している。このように，減点法アセスメントから始まるソーシャルワーク実践は，継親子家族を定形外家族として追い詰め，親支援を硬直化させる可能性がある。これは，課題解決が必要な問題を抱えている家族として減点法アセスメントに偏向しがちな生活–エコシステムモデルによる支援にもいえることであり，定形外家族という「どうにもならない社会的な弱さ」は残ったままなのである。

こうした現状から，ソーシャルワーク実践として着手されていないストレングス–レジリエンスモデルによる具体的な支援方法の確立が必要だと考える。家族レジリエンス概念を含めたジェネラリスト・ファミリーソーシャルワーク論の重要性を唱える得津（2018）は，地域レジリエンスを含めた「家族レジリエンス志向地域基盤ソーシャルワーク」がファミリーソーシャルワークの方法論であるとしている。つまり，家族内という閉じた世界で生起する葛藤や問題として捉えるのではなく，家族と地域，その交互作用のもつ強さへのアセスメントをはじめとする支援過程が展開されてこそ，標準家族，定型家族への幻想から解放されたオルタナティブ家族としてのステップファミリーが形成され，必要な社

会資源が創造されると考える。

以上を踏まえ，次章からストレングス–レジリエンスモデルによるソーシャルワークの展開方法として，エコスキャナーとライフストーリーワークの 2 つの方法に焦点化し，それぞれの実践特性を比較分析しながら，ストレングス–レジリエンスモデルにむけた支援ツールの展開構想について考察してみたい。

## Ⅳ．ステップファミリー支援ツールとしてのエコスキャナーとライフストーリーワークの特性比較

エコスキャナーは，エコシステム構想に具備されたコンピュータ支援ツールの呼称で，太田（1992）をはじめ，「エコシステム研究会」により研究が深化されている。エコシステム構想とは，利用者の生活を認識するエコシステム視座を実践理論として具体化し，実践に応用展開しようとする試みである。その具体化する際に活用するのがエコスキャナーであり，生活の詳細なアセスメント情報を支援に必要な情報因子へと処理・加工し可視化するアセスメント支援ツールである。エコスキャナーに備わっているメンテナンス機能を使って当事者の固有な生活を描き出せるよう質問項目を改変することで，様々な現場に応用できることが報告されている（太田ら 2005，2017）。エコスキャナーを活用したソーシャルワーク実践事例の詳細は，紙面の都合上別紙[19]に譲るが，科学的なエビデンスを量的に，一方で可視化された生活状況を介した利用者との実存的コミュニケーションを通じてナラティブを質的に担保することが期待されている。しかし，現状では科学性の追究にむけた研究成果が多く，当事者の声を紡ぎ寄り添う実存的な支援過程考察は深化しているとは言い難い状況である（図 1 参照）。

一方，ライフストーリーワークは，ライフストーリー研究という社会調査の手法から派生した実践であり，ソーシャルワークでは，出自や養育過程を理解していない社会的養護の子どもたちに対し，エコマップや年表づくり，人生曲線，過去と現在のむすぶ木のワーク等多様な支援ツールを使って家族情報を内面化させ，主観的な自己理解を客観的に理解する支援方法として用いられている（才村ら 2016）。才村眞里を中心にした「大阪ライフストーリー研究会」をはじめ，多くの臨床研究[20]により蓄積された方法といえる。ライフ

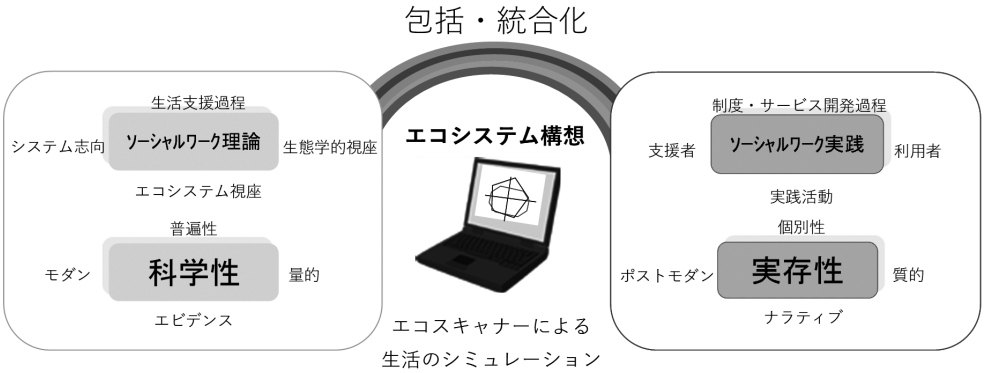



**図 1**　ソーシャルワークにおけるエコスキャナーの意義（小榮住 2020）

ストーリーワークは，単なる語り手としての存在だけでなく，支援者と対象者の対話を通じた協働による意味づけ，価値づけが行われる点，また自分が恣意的に選び語ること以外のことについて支援者が尋ね，聴き，言語化し，意味づけていく点に大きな意義がある。例えばエコマップは環境因子とその関係性を俯瞰視でき，年表づくりや木のワークでは心理社会的アプローチ，ナラティブ・アプローチによる意味づけ，価値づけにより，過去，現在，未来に対する恣意的な自身の画一的評価が書き替えられ，新たな価値で自らのライフストーリーを創造・構築するといったソーシャルワーク実践が可能になる（図 2 参照）。

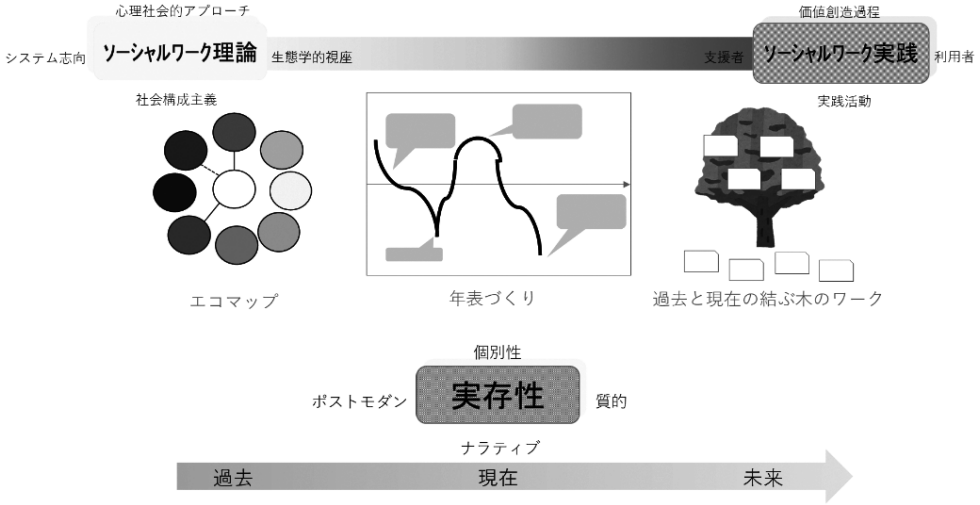



**図２**　ソーシャルワークにおけるライフストーリーワークの意義（小榮住 2020）

これら支援ツールの特性を比較すると図 3 の通りに整理できる。エコスキャナーは実践の科学化にむけたエコシステム構想に具備された支援ツールであり，普遍性，論理性，客観性の担保にチャレンジする架け橋となっている。普遍性については，設定された 1 つの切り口で情報を入力し，数値に基づくデータとして結果が示されるエコスキャナーだからこそ，同居別居の有無など継親子のさまざまな形態があっても，継親子関係があれば普遍的に活用可能といえる。また，論理性は，乖離する理論と実践，科学性と実存性，ミクロとマクロを包括・統合化する等，具体的な方法として考案されたエコスキャナーであることから，ジェネリック・ソーシャルワークが基盤となる理論といえる。客観性は，可視化された結果を通じて，支援者の認識や解釈を当事者へ投げかけ，事実を問い直す方法で担保しようとしている。一方，ライフストーリーワークは，個別性，物語性，主観性を重視した方法といえる。支援ツールを通じて継親子関係を含む家族構成員同士の関係性や，当事者固有の成育歴からステップファミリー形成過程という一連の人生におけるライフイベントやそこで湧き起こった感情や言動等を思いのままに描き可視化する方法で個別性を重視している。また，当事者固有のオリジナルな物語性を大切にした支援者と当事者との対話による支援過程であり，事実よりもどう当事者が実感したのか，価値や意味といった主観性を尊重する方法といえる。

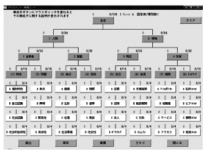
| | | | |
|---|---|---|---|
| エコスキャナー<br>  | 普遍性<br>継親子関係家族–環境システム<br>構成員同士の相互関係<br>ステップファミリー変容過程 | 論理性<br>ジェネラル・ソーシャルワーク<br>・理論と実践の包括・統合化<br>・科学性と実存性の包括・統合化<br>・ミクロとマクロの包括・統合化<br>・実践モデルとアプローチによる専門的かつ体系的な実践理論 | 客観性<br>可視化された生活シミュレーションを通じた支援者の認識・解釈による当事者への事実の問い直し |
| ライフストーリーワーク<br> | 個別性<br>当事者の個別性の高い成育歴<br>個別性の高いステップファミリー形成過程 | 物語性<br>社会構成主義ソーシャルワーク<br>・当事者の認識に基づく固有で多様な意味づけや価値づけ | 主観性<br>当事者の内面的かつ恣意的な認識・解釈にもとづき描き出され言語化された人生そのもの |

**図3**　エコスキャナーとライフストーリーワークの特性比較

資料：太田義弘・中村佐織・安井理夫編著（2017）『高度専門職業としてのソーシャルワーク――理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館，161–164及び才村眞里，大阪ライフストーリー研究会（2016）『今から学ぼう！ライフストーリーワーク――施設や里親宅で暮らす子どもたちと行う実践マニュアル』福村出版，152を基に筆者作成。

## Ⅴ．ストレングス–レジリエンスモデルにむけた支援ツールの展開構想

先述した通り，エコスキャナーとライフストーリーワークは，支援ツールとしての形態こそ違うものの，アセスメント結果の可視化とその可視化された結果を介した支援者と当事者の対話に基づく前向きな意味づけや価値づけによるストーリーを重視したソーシャルワークの方法といえる。また，ジェネラル・ソーシャルワークが重点的に挑んでいる実践の科学化と社会構成主義ソーシャルワークが主軸とする実存的支援をも相互補完，相互強化しあう方法でもある。この2つの支援ツールを介したソーシャルワーク実践によって，ステップファミリー支援に求められる地域を基盤とした家族関係への客観的かつ俯瞰視できるアセスメントと，その強さを活かしながら葛藤や問題といった逆境をどう跳ね返し，継親子家族を形成してきたのかといった新たな意味づけ，価値づけに基づく変容過程（ストーリー）に寄り添う支援が可能となり，オルタナティブな物語の再構築を通じた課題解決，価値創造ができると考えている。

具体的な展開過程として，アセスメントではエコスキャナーを活用し，家族関係，強さ，家庭基盤，地域や社会とのつながりといった人と環境へのエコシステム視座に基づくひろがりへの理解と，継親子関係を含む家族構成員同士の交互作用理解を通して，家族と地域のもつストレングスを把握する。また，その結果も踏まえた上で，当事者個人の成育歴も含め，ステップファミリー固有の家族形成における変容過程が理解できるライフストーリーワークを実施し，ステップファミリー発達周期と関連させながらストレングス–レジリエンスに着目した新たな意味づけや価値づけによるストーリーを構築し，課題解決にむけた支援過程を展開していくこととなる。この一連の支援過程こそがステップファミリーとして家族をエンパワメントし，多様な家族の在り方を認めあう地域社会にむけ新たな価値を創造することに繋がるのではないだろうか。

以上のことから，機関や施設等における家族維持機能を含めた家族再統合支援や親支援など，緊急性を要しないものの継続性が必要なステップファミリーに対する寄り添う支援

には，地域を基盤に生活するステップファミリーの独創的かつ共創的な強さやレジリエンスに着目した支援過程の展開は，家族エンパワメントや課題解決に不可欠な家族の主体形成を可能にすると考える。エコスキャナーとライフストーリーワークの支援ツールを介したソーシャルワークの支援過程はその実現にむけた可能性を有するものと考えている。

## Ⅵ．おわりに

本研究は，わが国におけるステップファミリー支援の現状を社会資源と支援方法を整理することで，ステップファミリーを対象にしたソーシャルワークの課題としてストレングス–レジリエンスモデルによる実践が必要であるにも関わらず，方法として未着手であることが浮き彫りとなった。このモデルによる支援方法を確立することが，求められる寄り添う支援，見守る支援の具体的な方法を確立することにつながると考え，エコスキャナーとライフストーリーワークによる支援方法を構想し，その意義と可能性を論じた。虐待予防支援，親支援，家族再統合支援，子育て相談支援といった場面で継親子家族のもつ独創的かつ共創的なストレングス，レジリエンスが発揮されるステップファミリー形成過程の語りに耳を傾けることこそが求められるソーシャルワーク実践だと考える。

いまだ標準家族・定形家族として生きる選択しかない一辺倒な価値を強いる閉塞的な社会のなかで，ステップファミリーに対するソーシャルワークの不在は，ニーズの掘り起こし，それに基づく福祉政策や福祉サービスを創造する機会だけでなく，地域にある民間支援組織や団体とのネットワーキングの機会すら奪ってきたといえる。創意工夫しながらレジリエンスを発揮し解決してきた強さに着目したソーシャルワーク支援過程は，ステップファミリーの抱える葛藤や悩みを解決するだけでなく家族エンパワメント実践でもあり，家族の多様性を尊重する持続可能な共生社会の実現にむけた価値創造過程ともいえる。

今後は，本構想の具現化を始動しなければならない。ステップファミリー形成過程に基づくライフストーリーワークシートの開発に加え，家族と家庭環境，地域環境を踏まえたステップファミリーの生きる生活世界に迫るエコスキャナーの改変によるプロトタイプの作成にむけ研究を進めていきたい。

**付記**

本論文は，小榮住まゆ子（2020）『日本離婚・再婚家族と子ども研究学会第 3 回大会論文集』17，に基づき再構成したものである。

### 注

1）三井住友カード公式「家族ポイント『だって，家族だから篇』」30秒2020年 1 月 1 日㈯から全国で放映中。（https://www.youtube.com/watch?v=2C_XbJW-ja4,2022.2.4）

2）朝日新聞朝刊で2018年から2022年の 5 年間，ステップファミリー内で生じた虐待事件として報道されたのは12件で，内訳は傷害事件 7 件，虐待死事件 5 件（内，不倫相手の子への虐待死事件 1 件）であった。例えば，2022年では①和歌山県和歌山市で当時16歳の鶴崎心桜さんに継続的な身体的虐待及び衰弱死させた容疑で母親の夫（継父）が保護責任者遺棄致死の疑いで逮捕された事件，②大阪府摂津市内で 3 歳の男児が母親の交際相手から虐待をうけ，児童

相談所等が関与していたにもかかわらず死亡する事件，③宮崎県宮崎市で10歳未満の女児が母親の交際相手から暴行され2週間のケガを負わされ母子で保護された事件などがある。

3）ステップファミリーをめぐる定義について整理する以下論文を参照されたい。小榮住まゆ子（2020）「わが国におけるステップファミリーの現状と子ども家庭福祉の課題――ソーシャルワークの視点から」『人間関係学研究』（椙山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）18, 24.

4）京都府「明日天気になあれ――こどもと一緒に新しい家庭をつくる人々の幸せのために（file:///C:/Users/mayuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/Q1O8ES7D/stepfamily.pdf,2020,4,16）

5）枚方市「ステップファミリー応援冊子　ようこそよろしく　おとな編」（file:///C:/Users/mayuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/VTLDUO09/otonahen.pdf,2020,8,15）

枚方市「ステップファミリー応援冊子　いつもとなりに　こども編」（file:///C:/Users/mayuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/WV6GZQ3W/kodomohen.pdf,2020,8,15）

6）東大阪市「いろんな家族のカタチ　おとな編」（https://www.city.higashiosaka.lg.jp/kosodate/cmsfiles/contents/0000030/30447/otona0604.pdf,2022,3,17）

東大阪市「いろんな家族のカタチ　こども編」（https://www.city.higashiosaka.lg.jp/kosodate/cmsfiles/contents/0000030/30447/kodomo.pdf,2022, 3,17）

7）小野市「ステップファミリー応援冊子　ステップバイステップ　あしたへ　おとな編」（file:///C:/Users/mayuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/Y1PZC40T/23084.pdf,2020,8,14）

小野市「ステップファミリー応援冊子　家族になったよ　こども編」（file:///C:/Users/mayuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/VTLDUO09/23085.pdf,2020,8,14）

8）横須賀市「ステップファミリーのための子育て相談」（https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/3440/step.html,2020,3,20）

9）大垣市「令和元年度第3回子育て支援会議議事録」（file:///C:/Users/mayuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/VTLDUO09/kaigiroku.pdf,2020,3,20）

10）豊後高田市「子育て世代ステップファミリー応援金」（https://www.city.bungotakada.oita.jp/page/page_02763.html,2020,3,20）

11）社団法人SAJホームページ（https://saj-stepfamily.org/,2020,2,1）

12）NPO法人M-STEPホームページ（http://m-step.org/,2020,2,1）

13）ステップファミリーサポート協会カモミールホームページ（https://peraichi.com/landing_pages/view/stepfamily,2020,3,20）

14）Co-leadersホームページ（https://www.co-leaders.co.jp/,2020,3,20）

15）エスクルホームページ「ステップファミリーLINE」（https://skuru.site/stefa/,2020,8,31）

16）ステップパパの研究会ホームページ（https://note.com/step_papa,2020,2,10）

17）子連れ再婚　支え合おう　さいたま当事者の会発足，朝日新聞，2019,12,15. 朝日新聞デジタル，（https://xsearch.asahi.com/kiji/,2020,3,20）

18）高良麻子（2017）『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル――「制度からの排除」への対処』中央法規出版，183−184. において「闘争モデル」「協働モデル」について次のように提起している。「闘争モデル」は，「デモ，署名，陳情，訴訟等で世論を喚起しながら集団圧力によって立法的・行政的措置を要求する」モデル，「協働モデル」は「多様な主体の協働による非営利部門サービス等の開発とその制度化に向けた活動によって法制度の創造や関係等の構造の変革を目指す」モデルであり，日本のソーシャルアクションは後者の協働モデルであるとしている。

19）太田義弘・中村佐織・安井理夫編著（2017）『高度専門職業としてのソーシャルワーク――

理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館，161−164. にて16種類の支援ツールモデルが明記されている。

20）才村眞里，大阪ライフストーリー研究会（2016）『今から学ぼう！ライフストーリーワーク——施設や里親宅で暮らす子どもたちと行う実践マニュアル』福村出版, の他に高松里（2015）『ライフストーリー・レビュー入門——過去に光を当てる，ナラティブ・アプローチの新しい方法』創元社，園部博範・秋月穂高編著（2020）『子どもに寄り添うライフストーリーワーク——社会的養護の現場から』北大路書房など多数刊行されている。

## 文　献


池田ひかり（2015）「ソーシャルワークの実践現場における支援面での改善すべき点とその方法」SAJ，野沢慎司編監訳『国際シンポジウム2015　ステップファミリーの子どもと大人の未来のために』報告書　77−79.

石倉亜矢子（2020）「プレコングレス：講演２．地域において特定妊婦とその子育てを支える医療機関の役割」『日本周産期・新生児医学会雑誌』（日本周産期・新生児医学会）56巻 suppl.2号，S07−S08.

上田礼子（2021）『家庭と地域の連携でめざす子ども虐待予防——新しい実践ストラテジー』ミネルヴァ書房

大澤朋子（2012）「家庭支援専門相談員の機能と家族再統合」『社会福祉』（日本女子大学）53, 57−73.

太田義弘（1992）『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房

太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著（2005）『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング——利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規出版

太田義弘・中村佐織・安井理夫編著（2017）『高度専門職業としてのソーシャルワーク——理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館

大塚斉（2018）「ステップファミリーへの家族支援とは——家族の視点にたって考える」『世界の児童と母性』（資生堂社会福祉事業財団）84, 43−49.

緒倉珠巳（2021）「支援を通して見えてきたステップファミリーの課題——20周年を迎えるSAJの支援実践」『家族関係学』（日本家政学会家族関係学部会）40, 35−43.

勝見吉彰（2014）「ステップファミリーにおける親子関係に関する研究——子どもの視点からの検討」『人間と科学』（県立広島大学保健福祉学部）14(1), 129−136.

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課（2013）『子ども虐待対応の手引き（平成25年８月改正版）』101.

厚生労働省社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会（2018）『子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について』

厚生労働省社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会（2021）『子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第17次報告）の概要』

高良麻子（2017）『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル——「制度からの排除」への対処』中央法規出版

小榮住まゆ子（2017）「ソーシャルワーク実践アプローチの体系化にむけた研究——支援過程に焦点化して」『人間関係学研究』（椙山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）15, 13−24.

近藤真由子（2013）「子ども家庭相談の現状と課題——市町村におけるソーシャルワーク実践を中心として」『龍谷大学社会学部紀要』（龍谷大学社会学部）42, 14−25.

才村眞里，大阪ライフストーリー研究会（2016）『今から学ぼう！ライフストーリーワーク――施設や里親宅で暮らす子どもたちと行う実践マニュアル』福村出版

笹倉千佳弘・井上寿美（2018）「学校と家庭間『行き来』の観点からみた困難な家庭状況にある小学生の実態――学校・学級居場所化『きっかけ』把握のための研究方法を中心にして」『就実教育実践研究』（就実教育実践研究センター）11, 57–64.

高田恭子・藤間公太・面会交流実態調査研究会（2021）「面会交流の実態に関する社会調査（プレ調査）報告書」『大阪工業大学紀要』（大阪工業大学）66(1), 66–133.

瀧澤雪子（2015）「困難を抱えた生徒と向き合う――埼玉県定時制高校生自立支援プログラムにおけるスクールソーシャルワーカーの実践」『明治大学教育会紀要』7, 21–30.

瀧澤雪子（2017）「『子どもの貧困』をとらえなおす――スクールソーシャルワーカーによる『金銭基礎教育プログラム』の実践」『明治大学教育会紀要』（明治大学）9, 7–15.

得津慎子（2018）『家族主体ソーシャルワーク論――家族レジリエンス概念を手掛かりに』ナカニシヤ出版

中村和彦（2017）「ソーシャルワーク実践理論再構成への素描――『構造–批判モデル』導入と養成教育における具体的展開を構想して」『北星論集』（北星学園）54, 33–47.

新川てるえ（2017）『日本の子連れ再婚家庭――再婚して幸せですか？』太郎次郎社エディタ, 150–154.

野沢慎司・菊地真理（2014）「若年成人継子が語る継親子関係の多様性――ステップファミリーにおける継親の役割と継子の適応」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』（明治学院大学社会学部）44, 69–87.

野沢慎司（2015）「ステップファミリーの若年成人子が語る同居親との関係――親の再婚への適応における重要性」『社会イノベーション研究』（成城大学社会イノベーション学会）10(2), 59–84.

水谷誉子（2014）「ステップファミリーの子育てにおける母親の役割とストレス」『心理臨床学研究』（日本心理臨床学会）32(2), 238–249.

山縣文治（2021）「子ども虐待と予防――子ども虐待死亡検証報告を踏まえ」『人間健康学研究』（関西大学）14, 27–37.